



四日目追加 HO
スミレ




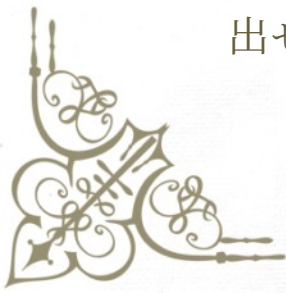


マリーを見送ったあと、土砂崩れと向き合った。
肉体労働は慣れている、慣れてしまっている。

魔法のことを誰かに話したのは、はじめてだった。
魔法をかけられた人間はもはや人ではない。
少なくとも、僕やジーナはそうだった。
僕はどんなに傷がついてもすぐに治ってしまう。
そのせいで細胞の老化も遅く、ほかの人間よりも遥かに長く
生きられる体になってしまった。
ジーナは意思を失くした人形のようにだった。

屋敷での出来事を思い出し、胸の奥が重い。
同時に僕たちに魔法をかけた奴のことを思い出して——
この気持ちが怒りなのか、恐怖なのか、嫌悪なのか、わか
らなかった。

マリーは魔法のことを知って、どう思っているのだろうか。
去り際に『休憩は取ってください』と言っていた。
それは人にかける言葉だ。
いつものおせっかいのようにも思えるけれど、いつも通り
過ぎて、本心が見えない。
……けれど、そのおせっかいを焼くところは、かつての
ジーナみたいだった。
年下なのに、なにかと口出ししてくるところなんてそっくりで。
マリーのことを考えればジーナを思い出し、ジーナを思い
出せばマリーと重なった。





「変わった子だな」

自然と口角があがる。
重くなった胸の奥が少しだけ軽くなった気がした。

土砂をかきわけ、倒木を引き抜き、少しずつ道を開いていく。

自分の意思でこの体を使おうと決めたのは、はじめてだった。

僕一人がここから離れるなら、土砂崩れを乗り越えていけばいい。

しかし、マリーには難しいだろう。

僕は今、彼女のために道を開けようとしているのだ。

部屋を提供してくれたこと、食事を与えてくれたこと、そして、画材を買ってきてくれたこと。

これだけでも十分恩返しするに足るけれど、それでも自ら進んで提案したのは、ジーナと重なる部分が多いからだろうか……。

行く当てのなかった僕を孤児院に誘ってくれたのはジーナだった。

ゴミをあさっていたころの僕は明日の食事もしれない孤児で、ついに空腹で動けずに道端でうずくまっていた。

「ねえ、大丈夫？」





やけに明るい声だ。

うずくまる僕の顔を覗^{のぞ}き込むように、ジーナも地面に顔をつけてこちらを見ていた。

目の前に顔があって驚いたけれど、声を出す気力もない。

「だめそうだね」

そう言うと、彼女はポケットから小さなリンゴを取り出した。

「これ、本当は私のおやつなんだけど食べていいよ」

目の前には赤く光る果実。

僕はなににも言わず、それにかじりついた。

今思えば孤児院で出されたリンゴだからそれほどいいものではないけれど、とびきりの味だったのを覚えている。

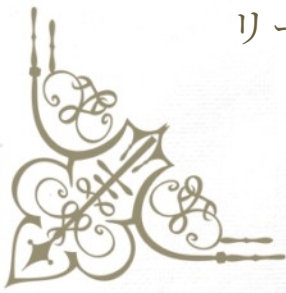
それからジーナに連れられ、僕は彼女が暮らす孤児院に身を寄せたのだった。



孤児院で暮らしているときも、ジーナはなにかと僕の面倒を見てくれた。

それこそおせっかいと言えるほどに——。

懐かしいな。

今まで思い出すこともなかった過去を振り返れたのは、マリーと過ごしたからなのか。





さまざまなことを考えながら作業を進め、太陽が天頂に差しかかるまえに切り上げた。

井戸水で体を流し、小屋へ入るとテーブルにリンゴを含めた果物が置いてある。

マリーが『食べてください』と言っていたっけ。

その場で甘いリンゴにかじりつき、そして、テーブルに飾られていた花に気づいた。

花瓶に入れられたその花は、彼女が摘んだものだろう。

花が好きなのだろうか。

それから部屋に戻り、二、三枚絵を描くと眠気がやってきて、夕方まで眠ったのだった。

